

コロナ禍の危機の時代にこそ、
生命の源に遡る対話と、
魂をよみがえさせる歌を！

石牟礼道子・多田富雄
深き魂の交歓

言魂

— 詩・歌・舞 —

水俣のたどってきた五十年をまざまざと思い出します。最初から、国家的欺瞞を身をもって見破ったのは、おそらく水俣病患者でありました。厚生省の組織が原因や責任の所在を隠すように動く、たちまち県の行政も市町村の末端組織、行政協力員に至るまで、いつせいにこれにならつて動き、一部の医師たちでさえこれにならつて、病人を侮蔑してはばかりませんでした。闇に葬られた患者たちがどれほどいたことでしょうか。事件発覚より、五十年の年月が経ちました。医学的に救済された人はただの一人もおりません。

石牟礼道子 第十信より

私は曲がりなりにも科学、それも生物学をやつてきた人間です。水俣に象徴される生命環境の汚染は、生物全般の生存を脅かすものであることに気づかぬわけはありません。しかも汚染は地球環境にとどまらず、内部世界、つまり人間の魂を犯し続けています。内部世界の汚染、危機をどう告発するのも話題にしたい。本当に救いはあるのでしょうか。今、生命と魂のことを語るのは、石牟礼さんくらいだとさえ思うからです。そんな願いでこの往復書簡を始めることにします。

多田富雄 第一信より

「また来ん春」を
折ることとします。
多田富雄



出演者 坪井美香
笠井賢一

なかええみ

桜間金記

謡(録音) 野村幻雪

能管・尺八 設楽瞬山

歌・板三味線
キーボード 佐藤岳晶

11月13日(土) 15時〜17時
事前講座 ありらん文庫資料室

12月19日(日)

14時30分開演

森本能舞台

石牟礼道子と多田富雄の往復書簡『言魂』(2008年藤原書店刊)は、多田さんが脳梗塞による半身麻痺に加え言語障害・嚥下障害、そのうえ前立腺癌の闘病の渦中に、石牟礼さんもパーキンソン病が悪化している状況で始められた。

この二人の渾身の対話に感銘し、お二人の新作能の演出を手掛けていた私は、2008年の7月に「アトリエ花習」の旗上げの公演としてこの対話を軸に、お二人の詩や新作能の実演も挿入して上演した。

多田さんは、自ら立ち上げたINSLA(自然科学とリベラルアーツを統合する会)主催の講演会「日本の農と食を考える―農・能・脳から見た―」2010年4月11日「東京大学安田講堂」での催しで、開会の挨拶をされ、野村万作師の『三番叟』をご覧になり4月21日に逝去。翌年3月11日に東北大津波により多くの人が亡くなり、福島原発事故をおこした。3月11日が誕生日の石牟礼さんは2018年2月10日九十歳で逝去。お二人は生命環境の汚染を深く危惧しながら亡くなられた。

多田富雄没後11年・石牟礼道子没後3年、二人の対話時に危惧していた生命環境の汚染はいよいよ深刻となり、政治は隠蔽と虚偽に満ちて劣化を極め、環境破壊も要因である新型コロナウイルスのパンデミックはまだ先が見えない。お二人の深い危機感からの対話を、混乱を深める現代にいかにつなげていきたい。

〈『言魂』の九州公演にあたって〉

2019年4月20日多田富雄没後9年追悼公演で朝鮮人徴用工をテーマにした多田富雄作『望恨歌』を上演した。そのおり福岡在住の作家林えいだい氏の『死者への手紙』という1990年のドキュメンタリーが多田さんがこの能を書く導火線となったことが明らかに、上演の過程が同じく九州朝日放送でドキュメンタリーになった。以来林えいだい氏の遺志を継ぐ「あらん文庫」の森川登美江さんから『言魂』九州公演の強い要請があり、このたび文化庁のAFF助成により実現することになった。さらに『望恨歌』の九州公演につなげていきたい。

アトリエ花習 笠井賢一

◆プロローグ 石牟礼道子『緑亜紀の蝶』より「空と海と」

歌と舞 坪井美香 なかえみ
キーボード 佐藤岳晶 笛 設楽瞬山

第一信 受苦ということ ―多田富雄

◆多田富雄詩『歌占』

尺八 設楽瞬山 キーボード 佐藤岳晶

第二信 なふ、われは

生き人か、死に人か ―石牟礼道子

◆多田富雄能『無明の井』より謡(録音) 野村幻雪

第三信 老人が生き延びる覚悟 ―多田富雄

第四信 いまわの際の祈り ―石牟礼道子

◆多田富雄詩『君は忿怒佛のように』 笠井賢一
能管 設楽瞬山

第五信 ユタの目と第三の目 ―多田富雄

休憩10分(換気)

◆石牟礼道子詩『浜の甲羅』 坪井美香
尺八 設楽瞬山

第六信 いのちのあかり ―石牟礼道子

第七信 自分を見つめる力・能の歌と舞の表現 ―多田富雄

◆石牟礼道子能『不知火』より 謡・舞 櫻間金記
能管 設楽瞬山

第八信 花はいずこ ―石牟礼道子

◆石牟礼道子『六道御前』より 浄瑠璃 歌・板三味線 佐藤岳晶

第九信 また来ん春 ―多田富雄

第十信 ゆたかな沈黙 ―石牟礼道子

◆エピローグ 多田富雄詩『新しい赦しの国』 笠井賢一
石牟礼道子詩『花を奉る』 坪井美香 笠井賢一
尺八 設楽瞬山

※往復書簡の多田富雄は笠井賢一、石牟礼道子は坪井美香が語る。◆印は挿入作品

多田富雄 1934年茨城県結城市生まれ。東京大学名誉教授。世界的な免疫学者として抑制T細胞を発見。野口英世賞、朝日賞など多数受賞。文化功労者。能に造詣が深く、自ら小鼓を打ち、心臓移植を主題とする「無明の井」をはじめ『望恨歌』『石仙人』など現代の課題をテーマとする新作能を手がけた。2001年脳梗塞に倒れて後、詩人・能作者として再生、「原爆忌」「長崎の聖母」「沖縄残月記」「花供養」など新作能を書いた。リハビリ診療報酬改定の撤回を求める運動に取り組み。著書に全詩集『寛容』『免疫の意味論』『脳の中の能舞台』『残夢整理』等多数。自然科学と人文学の統合を体現した「万人能」であった。パンデミックについてINSLAでも取り上げたことがあり、存命であれば如何なる発言をされるかも考えさせられる。

石牟礼道子 1927年熊本県天草郡生まれ。詩人・作家。「苦界浄土―わが水俣病」は文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として完成させた。マクサイサイ賞、紫式部文学賞朝日賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。著書に「はにかみの国 石牟礼道子全詩集」「石牟礼道子全集」「不知火」を藤原書店より刊行。作家としてのすべてが凝縮された新作能「不知火」は東京、熊本、2004年には水俣で奉納上演された。多田富雄は新作能の類型を破る画期的な作品と評価した。現代の病巣を癒す力と、深い祈りと歌に溢れた作品群は日本文学の枠を超えた重要な文学となっていて、「コロナ禍の今日ますます示唆に富んでいる」。

事前講座 11月13日(土) 15時〜17時
演出・出演の笠井賢一が映像と実演を交えて『言魂』の事前講座をします。
○あらん文庫資料室 福岡市中央区博多2-23-16
○入場無料(限定25名・公演のチケット購入者優先)
○お申込み 092-406-8609

2021年12月19日(日)
14時30分開演(14時開場)
森本能舞台

全自由席3,000円/前売2,500円
お問合せ・お申込み

記録作家林えいだい記念あらん文庫資料室
TEL・FAX 092-406-8609
メール tonie-m@satsuna77.com
アトリエ花習
TEL 090-9676-3798
FAX 044-989-0133

森本能舞台★
地下鉄 桜坂駅 徒歩1分
バス停 桜坂駅 徒歩1分
15階建の茶色のビル
マクドナルド
動物園入口 至博多駅
至六本松